

# 槐 かい

岡井省二創刊

令和2年12月号

令和二年十二月一日発行 第三十巻第十二号 通巻第三五四号（毎月一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 菊花展

高橋将夫

水澄みて水なくなりしごときかな  
真つ新たな空間を生み蘆を刈る  
一面の芒はやがて雲となる  
石庭に調和してをる秋の蝶

秋天や人がゐるから愛もある  
銀漢や異邦人とは異星人

秋出水神もバランス崩すなり  
秋深む人生相談してされて  
秋の虹その先にある最晩年  
心身のバランス保ち敬老日  
どの菊も自信に満ちて菊花展

# 槐安集

加藤みき

満月やくろぐるピルの並びみて  
むき出しの棚田の土に小鳥くる  
椋鳥の番で歩く大入日  
足長の鳥も短かき小鳥も来  
超音波にて探られし秋の昼

中島陽華

白南風や満中陰はじよじよに履いて  
中庸は能の小道具秋の空  
滴るや朝の眞言たてまつる  
秋清水口に含みて省二の忌  
浦神よヒオウギ貝よ那智の夏

近藤喜子

ばつたと友でありし頃きらきらす  
頭を突き抜く京劇のこゑ曼珠沙華  
秋思いま内なる宇宙みつめぬ  
遙か来し風の形に芒原  
よく眠れる虫のこんな鳴く夜は

瀬川公馨

木漏れ日やほぼ完結の晩夏光  
茴香の小さな花束もらひけり  
陰に陽に葛の宿とは言はざりき  
御大名が菊人形の元祖かな  
雲のまにまに花葛の魔香かな

竹内悦子

初秋の百万遍のカツカレー  
まんまるい雲に臍あり柿熟るる  
心経の途中忘るる萩の風  
天空に鳥の乱舞や初紅葉  
眠るまで白さるすべり揺るる音

雨村敏子

秋茄子勾玉のごと曲がりける  
送り火の燈心にある揺らぎかな  
夏霧の奥へ奥へと道のあり  
稲妻や消えたるあとに見ゆるもの  
後の菊道のべに色を深かむ

柳川晋

カルストの底より昼の流れ星  
秋の雲らしからぬ怪気焰  
ウイルスが三舎を避くる茸山  
若き日の夜長の涯を抜け出せぬ  
目が合うて何言ひ残す秋の蛇

熊川暁子

日の鞆まだ吹き熄まぬ九月かな  
一村を虫籠となす虫しぐれ  
鉦叩たたき憂き事たひらにす  
月明の沓脱ぎ石になにも無し  
昇る月我が足も地を離れたり



江島照美

存在の香りを残す夜の桃  
ほらごらん無明世界の秋夕焼  
コロナ禍や歌を忘るる小鳥ゐて  
同棲の始まる匂ひ蛇穴に  
黒猫は闇より入る踊の輪

岩下芳子

高原や芒を濡らすほどの雨  
指舐めてこの指止まれ赤とんぼ  
穂の色を見比べて飛ぶ稲雀  
鬼の子や目鼻のつかぬ顔容  
夜の帳下り長き夜の始まりぬ

寺田すず江

目覚むれば一足飛びに秋の風  
空を映して川は流れる秋入り日  
身ほとりの夕映えにいまカンナ燃ゆ  
沖波の高くなりゆく雁渡し  
鱚雲腰を伸ばしてながめけり

有松洋子

「第三の男」流るる秋の空  
天の川あの笹舟の流れをり  
秋通路なに思ひ出しふり返る  
ふるさとの川は暗渠に鱚雲  
残る虫己が触角のみ信じ

田中信行

悪女らし胸の谷間や氷水  
菊人形男嫉妬底深し  
浮浪雲乗り換へ駅の曼殊沙華  
秋の水変わらぬものを慈しみ  
時空超え詩人旧居の籐の椅子

近藤紀子

サマーカットの犬の体温抱きをる  
稲穂に触れ防人の歌思ひをり  
母は栗を剥く人我は食べる人  
夜ごと白く花からすうり誰がつむぐ  
まん丸の赤い大きな月のあり

岩月優美子

秋嶺や戻らぬ日々を懐に  
蛇穴に入る混沌の世を後にして  
密さけて住まふ蓑虫の心境  
仲直りしよう秋虹消えぬ間に  
台風や恐竜のごと迫る波

竹中一花

幼子の頭に胸に草の花  
ひよんの実や山を降りくる又三郎  
龍田姫連れて帰らむ丹波越  
金銀の鈴音空へ豊年祭  
薬湯の赫き香の立つ秋の昼

前田美穂子

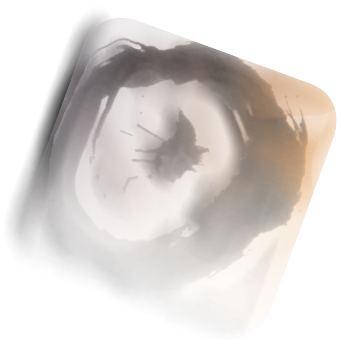
石の声聴いてをるなり草の花  
ここからが村の入口花煙草  
何処迄も草紅葉たり過疎の村  
神具店閉めたままなり虫すだく  
風花や小芥子の里の大こけし

吉田順子

紫の山一つ成す桔梗かな  
露草の瑠璃に手を触れこころ触れ  
沛然と雨やすつくと鶏頭花  
秋霖の音をとどめし石畳  
陶垣の小径抜けたる花野かな

中田禎子

一滴の目薬獅子座流星群  
荒鷹や日の道現るる熊野灘  
内宮の橋に立ちたり鰯雲  
笑栗や婆三人の恋話  
落し物心の中に秋の星



# 槐市集

阪倉孝子

旅ごころ吊皮にゆれ鰯雲  
祈ること多き日々なり雁渡る  
月代へ過去の扉は消えてゆく  
宵闇のそこに見ゆ背ナ追ひつけず  
誘ひくる夕べの風や萩の声

庄司久美子

プラタナスの木々さやぐなり月の道  
幸招く地湧蓮菊膾  
ぼて腹の様な海鼠壁秋の雲  
蟻螂や巨木に瘤のありにけり  
樺色の夕日の余韻虫の声



柴田靖子

栗拾ひ子供ごころとなりゆけり  
めぐみの雨大根蒔けよと声のする  
秋澄むや見なれし山河すつきりと  
秋めくや草木も人も生き生きと  
雲走り色変はりゆく秋の暮

杉原ツタ子

浮雲に預けし詩や秋麗  
涼風のすり抜けてゆく解脱門  
一服は扉の外よ箒草  
空蟬の根張り強さや白壁に  
立杭に靴の片方大夕焼

高野昌代

一休さん館ころ付ける秋彼岸  
百伝ふ廃屋の教会赤とんぼ  
颱風に護らる田畑ブルーシート  
百日紅揺れて濁世を払ふかに  
生き辛き峠を越へ来大花野

竹村 淳

ゆく夏を生駒に告げる夕陽かな  
主食たる矜恃光れる新米釜  
秋彼岸六波羅蜜を説く和尚  
止まり木のすぐに打ち解く新酒かな  
夏草や夕日背にして一仕事

田中美恵子

朝顔に体内時計ありにけり  
足しげく通ふ畑や鴟高音  
母の指にぎりしままや新松子  
帯締めて父に似てゐし案山子かな  
短冊のたはみし枝の萩の花

時澤 藍

そろそろと夏の疲れが声上げる  
一夜にてひまわり苑の田にかへる  
見物の声が手伝ふ池浚ひ  
間引き菜の一品となる夕餉かな  
過ぎ去れば並べて思ひ出秋簾

中 貞子

球体の中空にあり秋茜  
音楽を聞きしがごとく木の実落つ  
鐘の音に九月の音のありにける  
東山に先祖の骨やいなつるび  
上向きて生きたし余生野紺菊

中島久生子

ふかし芋昭和の味の遠くなり  
秋薔薇の剪定をする太き指  
夕立来て水やり三日休みとす  
秋驟 雨句 会 の 後 の 長 話  
産土の黄葉肩に二礼する

## 槐 集

### 高橋将夫選

ドローンに追はれて竜淵に潜む 守口 三木 亨

身の丈に合へばすぐ蛇穴に入る  
コロナ禍を土産話に去ぬ燕  
霧晴れてビッグデータがよく見える  
蓑虫が確かに鳴いて震度六  
遠雷や記憶の扉きしむ音

大阪 藤田美耶子

コロナ後の世界見すゑる墓  
野葡萄や縄文人の首飾り  
成就せぬ恋のかたみの蛸かな  
コスモスや風の中より楽生まれ  
兜虫心に鎧のなかりけり

平野 多聞

一打にも永久の命や鉦叩  
燃え尽きて化石となりし螢かな  
案山子みな藁をしとねの大往生  
抑圧に抗ふ拳赤のまま

色鳥とひらひら遊ぶ別天地 枚方 阪倉 孝子

みだれ萩迷ひしことも楽しくて  
実紫ひと日ひと日をねんごろに  
鬼灯へ夕日ふつくら宿りけり  
銀河濃し深夜便にて会ひに行く  
重陽や豆腐づくしでもてなせり

井上 静子

さらりと老い喉につるりと心太  
童唄風の抜け道柘榴の実  
わたくしに傾ぎて咲くや酔芙蓉  
貝開くこ糸の聞こゆる月の夜  
気怠さを腕に残して夏が行く

大阪 出利葉 孝

妍を争ふ空の碧さと桔梗かな  
風澱む滲む街の灯女郎花  
法師蟬昔話を聞かせてよ  
蟻地獄地球の裏へ抜ける道

# 銀河往来 高橋将夫

ドローンに追はれて竜淵に潜む 三木 亨

「竜天に登る」が春の季語なら、「竜淵に潜む」は秋の季語。春に天に登った竜が秋には淵に潜むのだ。何故だろう。作者によればドローンに追われたからということになりそう。

〈霧晴れてビッグデータがよく見える〉の句、霧が晴れても見えるはずがないコンピュータ情報の世界をシニカルに捉えている。

〈コロナ禍を土産話に去ぬ燕〉の句、秋に燕は南方へ帰るが、そこもまたコロナ災禍。

〈蓑虫が確かに鳴いて震度六〉、蓑虫が鳴くとは聞いたことはないが、「確かに」と作者が言うからには鳴いたのだろう。震度六の前兆だったのかもしれない。

〈身の丈に合へばすぐ蛇穴に入る〉、人間より蛇の方が余程己の身の丈を心得ている。

野葡萄 葡萄や縄文人の首飾り 藤田美耶子

野葡萄を見て首飾りを連想する感性を現代女性も失ってほしくないと思うことしきり。

〈コロナ後の世界見すえる墓〉の句、自粛しているわけではなからうが、墓はデンと構えてコロナ後の世界を見据えている。はたして、どう見ているのであろうか。

〈遠雷や記憶の扉きしむ音〉〈成就せぬ恋のかたみの螢かな〉〈コスモスや風の中より衆生まれ〉、いずれも作者ならではの発想の句。

兜虫 心に鎧のなかりけり 平野 多聞  
兜虫は鎧を着ているが心には鎧をまとはない。人は鎧を着ていないが、時折り心に鎧をまとう。

〈一打にも永久の命や鉦叩〉(案山子みな墓をしとねの大往生)はそれぞれ命の賛歌。

鬼灯 へ夕日ふつくら宿りけり 阪倉 孝子

夕方の鬼灯からソフトなぬくもり伝わってくる。

〈色鳥とひらひら遊ぶ別天地〉〈みだれ萩迷ひしことも楽しくて〉〈実紫ひと日ひと日をねんころに〉、どの句からも作者のおだやかな心境が伝わってくる。

〈銀河濃し深夜便にて会ひに行く〉は深夜便に対して「銀河濃し」の季語がよく効いている。

さらりと老い喉につるりと心太 井上 静子

まさに老いがさらりと詠まれていて、ユーモラス。

〈わたくしに傾ぎて咲くや酔芙蓉〉はなんとほほえましい一句で、心のゆとりを感じさせる。

妍を争ふ空の碧さと桔梗かな 出利葉 孝

「妖」は美しい、なまめかしいこと。「妖を争ふ」は女性や花々が美を競うこと。「紺碧の秋天」と「桔梗」が青の矜持を競っているという。

〈法師蟬昔話を聞かせてよ〉の句、夏の終りに鳴くつくつく法師の声には枇杷法師の平家枇杷を聞くような哀調がある。